

特定研究論文 I

## 農山村における地域づくり活動と外国人花嫁の参加の現状と展開

～山形県内陸北部の山村集落における事例から～

A4PD1304

東北大学大学院教育学研究科成人継続教育論研究コース

出川真也

## 目次

はじめに

第1節「現地」において外国人花嫁を語ることの難しさ・・・2

第2節 集落における女性たち・・・5

第3節 集落の新しい地域づくり活動の展開・・・7

第4節 山村集落の地域づくり活動にかかわる外国人女性たちの諸相・・・12

まとめ～地域づくり活動の中で紡ぎだされる共創への糸口～・・・17

参考資料文献

## 特定研究論文 I

## 農山村における地域づくり活動と外国人花嫁の参加の現状と展開

～山形県内陸北部の山村集落における事例から～

東北大学大学院教育学研究科成人継続教育論研究コース

出川真也

## はじめに

国際結婚を巡る言説の対象とされる代表的な地域、東北の農山村に住むこと、すなわち、その内部に入り込んでしまえば、なるほど、この国際結婚をめぐるテーマを語ることがとても難しいことに気づかされる。なぜなら—当然のことであるが—彼女らは「外部者」によって自分たちを問題・課題として語られることを好まないからだ。これまで研究者・マスコミは自身に自明なものとして付与されてきた「外部性」によって、ムラをそして彼女らを「外部から」表象してきた。そのような語り方は、彼女らにもそして取材・調査者にもよい影響を与えてこなかったように思われる。それどころか、彼女らに一種の不安感や不快感を与えたということもあるようだ。

それでもなお、ここで、ある山村集落を舞台にこのテーマについての事例報告を行うことには意義があるとする理由が存在していると思う。それは、近年の農山村の地域作り活動が、住民、行政、活動（運動）家・研究者の間に、より濃密で具体的実践的な新しい関係を創出しようとしているという、最新の状況である。現地の住民自らが今後の地域のあり方をめぐりまさに主体として行動を起こし始めていることに着目すべきである。しかもそれらの行動は、彼ら自身の生活地域の範囲を超えた、より普遍的な意義付け・価値付けによって動機づけられ、彼（女）ら自らによって語り始められている。本稿では、こうした最新の地域活動と地域の女性たちや外国人花嫁の関わりを取り上げたい。ここに、学問的関心を超えて、現実社会の関心事として、外部の研究者・活動家が果たせる社会的役割が存在することを感じるのである。

お気づきの通り、私の研究スタンスは自明に与えられた「外部性」に依拠して「科学的・実証的・客観的」に、現地を一方的に表象することではない。現地住民と共に笑ったり、泣いたり、怒ったり、楽しんだりしながら、社会現実と同じ作業者としてかかわり、共創しつつ表象することである。研究者自身もまた、彼（女）らと地域社会を共創する作業者の一員たるべきという認識から報告を行いたい。

本稿では、1、現地において外国人花嫁を語ることの難しさを確認し、2、集落における女性達と外国人花嫁の日常生活、地域活動に対するまなざしと実践の様相を見た後、3、地域集落の最新の活動展開と女性たちの参入、そして4、個々の外国人花嫁に3つの事例で登場してもらい、その様相を詳しく検討しつつ、農山村における共生・共創の地域社会作りへの糸口を模索する。

本論に入る前に、本稿で舞台となる地区における著者の立場を簡単に提示しておきたい。著者は、住民運動としての地域学習、環境教育、地域づくりをテーマに文化人類学的方法をもって研究を始めた。現在（2006年1月）そのフィールドワークは既に3年間を過ぎようとしている。当初、外部者として参与観察的に始まった私のフィールドワークも、後に見るこの地区の地域づくり活動（運動）の展開の中、著者自身も共創の一作業員として彼（女）らと深いかわりを持つようになった。実際、事例として取り上げる集落の地域づくり活動には、著者自身が活動事務局（あるいは一活動家と称すべきか？）として深く参入しているのである。したがって、著者は本事例に関して「外部性」を保有するという意味での客観的研究者の資格を有してはいない。

## 第1節「現地」において外国人花嫁を語ることの難しさ

### 1、「課題」として語られるムラの国際結婚

「ムラの国際結婚」という言葉を耳にするとき、とりわけ「東北の」という形容詞が前につくならば、読者は一体どんなイメージをするだろうか？「田舎での不便な農家生活、しわ寄せは弱い地位にある花嫁に集中する。人身売買のようにして来日し、旧態依然とした封建的家族関係の中で、舅姑、夫によって搾取される弱き花嫁。彼女は閉鎖的な農村集落の中、誰かに助けを求めることもできない。」こうしたイメージは「後進的な農村」や「ダサイ田舎」といったイメージと結びついて、諸悪の根源としての農村像を増幅していく。やがて、それは「矯正されるべき農村」という観念を増幅させるだろう。そのような語りを正当化する錦の御旗だっている。「虐げられた弱き女性を救い出すために」という錦の御旗である。

これが、80年代から今日に至るまで、各種週刊誌から研究論文まで通底している農村の国際結婚に関する語り口調であると思われる。農村の国際結婚は常に「問題」として語られるのであり、「課題」として解決されるべき事象として語られてきた。だが、ここでこうした語りは誰によってなされてきたのか、ということを考えてみたい。そう、これらの語りは、農村の地域住民によって、あるいは外国人花嫁によって主体的になされたものではないのだ。これらのイメージは、その語りの外部性によって作り出されてきたということに気がつかされるのである。ここでは、農村、そして外国人花嫁は「もの言わぬ他者」として外部から表象される存在であったのである。

### 2、住民の取材・調査者に対するまなざし

「語りが外部的であるって？」読者の中には首をかしげる人もいるだろう。なぜならば、取材者や研究者の語りは、他ならぬ現地の住民に対する綿密な取材・調査に基づいてなされている、とされているからだ。そして取材・調査者は各々の取材方法・調査方法により住民の声を集積し、彼らだからこそ一つまり、外部者だからこそ一行うことが

できる（とされる）科学的・実証的・客観的分析を加えてより「正確」に語ったものではなかったか。だからこそ、取材者・調査者の語りは、同時に村の住民の声でもあり、同時に客観的かつ実証的分析を付与されたものではなかったか、と。だが、果たしてそうだろうか？村に入って感じるのは現地住民と取材者・調査者との間の温度差ばかりである。私が村で住み込み始めてしばらくして、住民より取材・調査者に対して寄せられる声は次のようなものであった。

「彼（女）らが何を研究しているのかは、おらだには、まったくわからないことだべ。それにおらだにはあんまり関係なさそうだ。一体おらだのために何か役に立つんだべか？」これまで多くの取材を受けたある外国人花嫁は次のように語る。「家族をあまり悪く書かないでほしい。それは私たちが本当に言いたかったこととは、だいぶ違うし……。何を書かれているのか実際のところはよくわからない……。当時日本語もほとんどわからなかったから。だからちゃんと何を書こうとしているのか教えてほしい。」

ある地元の地域作りの活動家は次のように言う。「ここで俺たちが、どんなに地域の自然や文化を生かして、子どもたちへのさまざまな体験学習、地域づくりの取り組みをおこなっていても、そういった研究者は別段着目してくれるわけではないようだな。実際、いろんな研究者が来たよ。来たのはわかっているんだ。だけど彼らがどんな研究をして何を調べているのか、俺たちにはわからないんだ。で、気がつくともマイナスの要素、農村の問題点、外国人の嫁さんの話だとかそんなことで我が村は話題になっていたりするわけさ。」ある他の農村地域の活動家は次のように激しく訴えかけた。「学者は確かに正論を言うさ。都会の研究者や女性活動家が来て、男女共同参画だの、農家家族の封建制だの言うてくるよね。でも、その正論を支えるものさしは彼女らのものさしであって、彼女らにとっての正義さ。正論なんか我々だってわかっている。みんなそれを痛いほどわかっている、正論を言っているけどどうにもならないから、苦悩しながら取り組んでいるんじゃないか。彼らの研究は我々に訴えるものがないね。正論を言う奴は追い出してやれ。」

こうした感情こそ、私が村で研究を始める際に直面した、地元住民にしる外国人花嫁にしる、地域の住民に共通する冷ややかな視線の裏にあるものであった。実際、私が村に入ってから国際結婚、外国人花嫁を調査しようとする学生や研究者がたびたび訪れている。あるとき、そのような研究者のインタビューを受けたある女性（日本人）が不安そうに次のような相談を私に持ちかけた。「一体どこまでしゃべっていいんだべか。プライバシーにもかかわることだし……。何を研究し、どのように公表しようとしているんだべか？何のために……。」

これら住民の言葉の断片は、まさに住民と取材・調査者との間に引かれた一本の分断線を如実に示している。外部者は語るものであり、現地住民はたとえ語ったとしても、インフォーマントとして受身的な位置づけでしかない。何のために何がどのように語ら

れているのか、地域住民は蚊帳の外であり、語りの主体は常に外部にあったのである。私は認識論を言っているのではない、語りをめぐる権力論を言っているのだ。語られる内容や捉え方の真偽の問題ではなく、語る主体が一方に偏っていたことこそ問題である。そしてそのような語りの不平等な権力構造の中で作られたのが、国際結婚関係の一連の言説であった。

このような外部性に依拠した語りは住民の主体的語りを奪ってしまう可能性がある。農村の地域住民が、あるいは外国人花嫁が、自ら語りだそうとすると、直面するのが以上のような状況である。つまり、彼（女）らは、語られる存在としてあるポジションを既に同定されているのであり、実はそうした状況は彼ら自らの主体的語りを奪ってしまう可能性があるのだ。こうした状況は、農村地域から外部に対して外国人花嫁や国際結婚を語ることをますます難しくしてしまう。

### 3、最新の状況～地域活動の展開と外部者とのパートナーシップ、そして共創への模索～

さて、本稿で取り上げるのは農山村における地域作り活動とそこに参画する外国人花嫁の話である。これは見方を変えれば、語りをめぐる闘争でもある。現在、日本各地の農山村で起こっている地域づくりの動き、それは、地域住民自らが自らを独自の表象様式によって、主体として語りだそうとしていることを意味する。それも広範囲にわたって、より普遍的な意義付けと動機付けによって支えられ、発信しようとしている。こうした状況は、前述の語りの権力構造をも揺り動かそうとしている。

本稿では、そんな地域づくり活動の、もっとも小さな単位の農山村集落における最新の状況を取り上げる。そこでは、このように地域住民が主体的に活動し語りだそうとすることで、外国人花嫁たちもまた自らの役割を見出し活躍し、自らを自らの力で語りだそうとしているのが垣間見られるだろう。こうした状況において、従来のようなやり方で外部の取材・調査者が入り込み、語れるスペースはもはやない。普遍性や客観性、実証性は研究者によって一方的に付与されるものではなく、彼（女）ら自らが自らの努力によって作り出されるものなのである。

ここでは、「共創」のテーマが、地元住民と外国人花嫁の問題だけではなく、取材・調査者の問題でもあることに気づかされるだろう。取材・調査者も決して「外部」ではなく、同じく地域社会を形成すべき、共創の作業者の一員であり、その意味で共創をめぐり、研究・調査の新しいあり方が同時に求められているのである。実際、地域活動の進展の中で地域住民が壁にぶつかる時、逆に住民側からそうした新しいパートナーシップの相手として期待されている現状も既に確かに存在しているのだ。その意味で、最新の状況は、取材・調査者の活動領域を狭めたところか、そこに新たな可能性と役割を誕生させていると見るができるだろう<sup>1</sup>。そのような共創の一作業者としての取材・調査者像を模索しつつ本稿の事例を検討していきたい。彼（女）らを「もの言わぬ

他者」)としてではなく、同じく生き生きと語る主体として、共に社会を形成するパートナーとして付き合うこと、それが私の本稿における書くスタンスであり、今後こうしたテーマで農村集落に入ろうとしている取材・調査者に対して願っていることでもある。そのような観点から本稿を読んでもらうのであれば、幸いである。

## 第2節 集落における女性たち

### 1、地区の現状

話題となる農山村集落の基礎データを提示しよう。本稿の舞台は山形県の内陸北部に位置するある農山村集落である。地区の人口約 1100 人、世帯数は約 300 で 3～40 世帯からなる 14 の集落で構成される。地区の農地はその多くが中山間地に位置する。冬の積雪は 2メートル以上にも達する豪雪地帯である。地区の主な産業は農業であるが、中山間地域に位置するため、生産性は必ずしも良いとは言えず農業所得率は低い。20 年程前までは、冬季の出稼ぎが大変盛んだった。現在は冬季の出稼ぎも若干あるが、近隣の都市への通勤がほとんどを占める。だが、就職事情は厳しく、日雇いのような形での雇用が目立つ。また、生計を支えるため、子どものいる家庭では夫婦共働きが 90 パーセント以上を占めている。この地域では専業主婦層というのはほとんどまったく考えることができない。

過疎化に見舞われ、過去半世紀の間に地区の人口は半減した。追討ちをかけるように少子化によって地元中学校の生徒数は約 9 分の 1 に減少した。現在地元の小学校と中学校は小中併設校となっており、その児童・生徒数は 90 名に満たない。そのうちの 8 名が外国人花嫁と日本人男性の子ども、いわゆる「国際児」<sup>ii</sup>である。地区では、激しい過疎化と少子化のため、男女比の不均衡が生じている。また、中山間地の農業経営や地域経済の厳しい現状が、いわゆる「嫁不足」と呼ばれる現象を起こしていると考えられる。これはこの地区だけではなく、この地方全体に言える傾向である。地区内には 11 人の外国人花嫁が暮らしている。フィリピン国籍 2 名、韓国籍 1 名、中国籍 8 名である。若手世代の少ないこの地区において若手女性で 11 人が外国籍婦人であるというのは集落生活の中ではかなりの率であると感じられる。

一方で当地区はすばらしい里地里山の自然や地域資源とそれに根ざした生活文化に恵まれてもいる。春、雪が解けはじめると村は一面カタクリの花に覆われ、ギフチョウが飛び交う。集落上流部の美しい自然は映画のロケ地として選定が考えられたこともあったという。集落に隣接する里山はまさに山菜の宝庫であり、秋はキノコの宝庫である。山菜の郷土料理は 100 を超えるレシピが存在するし、キノコ料理も 50 以上はあると考えられる。山間地の火山灰土特有の土壌が栄養分を豊かに含む農産物を育て、地元農業を背景にした郷土食が数多く存在する。先日もテレビの全国放送で放映されており健康食として注目を集めている。地区を取り巻く自然はそこに暮らす人々の営みによって維

持されており、そうした集落住民の生活文化と自然が一体となって、ふるさとの原風景とも言える美しい山村の景観を形成している。そして、地区ではこうした自然と生活文化とが結びついて様々な地域行事や活動が行われている。伝統的な地域行事は、年 50 以上は存在しており、それらが、この地区の集落住民特有の近所づきあいの風景を形成しているのである。

## 2、外国人女性と日本人女性の目線の共通性と相違性～地域生活に対するまなざし～

こうした地域生活において、若手女性たちの言葉には否定と肯定の 2 方向の言葉が混在している。都会的な基準を前提にして地域生活の閉鎖性、後進性を指摘する言葉「ここは道が悪い、仕事場が遠い、ショッピングを楽しめる所もない・・・とにかく不便だ。」「農業？・・・汚い。山の生活？・・・見れば見るほど興味ないよ。」「地域行事が多すぎてわずらわしい、『因習』とっていいんじゃないかしら。それにどうしてこんなに人のことに興味があるのだろうというぐらいに、他人の話をする。閉塞感を感じるわ。」反対に、地域生活を肯定的に語る言葉「自然が豊かだ」「農業や山の恵みで様々な手作りの郷土料理がある」「集落の行事や活動は、他の人とふれあう温かみや一緒に行く面白さを感じる。楽しさや悩みを共有する場でもあるのよ。」

話をして感じられる傾向として、日本人女性にしる、外国人女性にしる、都市部出身の女性は前者の否定的言説が目立ち、地元出身の女性や地方出身の女性は、後者の肯定的言説が目立つということである。例えば首都圏出身の日本人女性と、韓国やフィリピンの首都出身の女性達の言説は、否定的語り口調が目立つ点で驚くほど似ている。逆に、中国の地方出身の女性達は肯定的に語ろうとする傾向がある。同じ中国でも上海などの都市部の女性は前者のような否定的語り方を強調する傾向がある。しかし、実際にはこれらの語りは同一の女性の中でも混在して語られるのであり、その意味で明確な二項対立図式を立てるわけにはいかないのだが。

こうした傾向には、この地域の自然や生活文化にアクセスするためには農山村にかかわる知恵や技術、見方と価値観を持つことが必要であり、外部者はなかなかこうした知恵や技術、見方と価値観を共有することが難しいということである。

## 3、地域行事への参加

地区内には多様な行事や活動があることを述べたが、女性の活動や組織もある。たいの外国人花嫁はこうした活動に参加しているようだ。例えば、この地区では集落ごとに「お観音講」がある。これは女性が月に一度公民館や民家を集って、ご詠歌を観音様に捧げるというもので、もともとは安産を祈願するものだったようである。現在でも世代層ごとに「お観音講」が組織されており、若手世代の女性達も月に 1 度集ってお観音講を開いている。そして、一応のご詠歌をあげた後は、回り順に決めた当番の女性が



作ったりみんなで持ち寄ったりした料理を食べ、飲みながら（お茶の場合もあるし、大々的に酒宴となる場合もある）、話をする。親睦の場、情報交換の場としての色彩が強い。ある集落では 11 名の若手女性のお観音講参加者のうち 2 名が中国人であり、みんなと楽しそうに話をしていた。このような場があることで、日本語の覚えも早かったという感想もある。また、ある集落では 10 人ほどのお観音講参加者の中で韓国人が 1 名入っているが、大変流暢な日本語で皆と談笑していたのが印象に残った。一方で、フィリピン人などは宗教的な理由から、お観音講には入っていない。

その他、婦人消防団や集落行事での台所・裏方の仕事、子どもが入っていればスポーツ少年団の応援や反省会まで日本人女性と同じように参加している。家族や周りの地域住民もなるべく彼女らを家にとどめておかないで積極的に集落の行事に出そうとしている。これらの地域活動には共同作業など集落や共同用地を維持するための行事もあるが、全体としては伝統的に行われてきた活動であり、明確な地域づくりの指針があるわけではない。しかし、集落住民同士の親睦やつながりを作り上げることには大きな力を発揮している。

それにしても何かにつけ親睦のための活動や飲み会の多い地区である。この地域において、活動や会合がある場合、一応全員に声がけするというのが原則だ。女性達の場合も例外ではない。その上で参加・不参加は各家庭の都合によるのだが、大きな理由がない限りなるべく参加するというのが暗黙の了承になっているようだ。活動や会合も皆が参加できるような条件や日程にしようと常に調整の努力がされている。この点で、外国人花嫁もしごく当たり前のように参加者名簿に彼女らの名前が載るのである。このような集落住民の傾向は、次節で述べる地域づくり活動の新しい動きにおいても同様だったのである。

### 第 3 節 集落の新しい地域づくり活動の展開

#### 1、行政・学校施策としての地域学習活動の展開

現在につながる当農山村地区の地域づくり活動の直接の発端は、社会教育活動であった。村の教育委員会、特に社会教育課では、学校週 5 日制を迎えるにあたって、どのように地域における教育活動を地域ぐるみで行えるのかを模索していた。そして地域ぐるみの教育活動は行政主導ではなく、学校と地域が連携しつつ、特に地域住民自らが主体となっていくことが大切だという方針を早い段階から打ち出していた。大きな下地となったのは、社会教育課が呼びかけ、各集落の面白おじさんたちの有志で構成している青少年育成村民会議の面々である。この集団が 10 年前より、ことあるごとに飲みながら、話をし、地域づくりや担い手作りのために、実際に自分たちが大事だと考え、できることを集落に持ち帰って少しずつおこなっていった蓄積は大きい。

平成 10 年からは、こうした村民会議の活動からさらに村内約 40 地区に青少年推進委

員を配置し地域の教育力の向上を目指した。学校との連携が重要だということで、平成 11 年からは県の委嘱事業「地域の学校づくり」推進事業を立ち上げ、翌年には全村レベルに拡大し、地域と学校連携での教育活動を活性化させようとしている。平成 16 年には社会教育課は学校教育課も含んで「共育課」となり、この動きを加速させている。こうした動きを行政内で担ったのが T 課長（当時、社会教育課長、現共育課長）であった。彼は、村の行政職員として 30 年ほどになるが、その間、行政の中で「特務」と言える部署に就いていた。彼の村は国際結婚関係で比較的村のバックアップが充実しているということで紹介されることが多い<sup>iii</sup>。彼もまた村の国際結婚関係の担当職員を勤めたことがあり、社会教育課長就任以前の 2 年間は最上広域で、国際交流・国際結婚担当として出向していた。平成 6 年から社会教育課長として在任している。ながらく国際交流・国際結婚の担当職員として在任していた彼は、「農山村の封建性とか家族問題とか、結局変わらねばならないのは、我々農村に住む日本人の方なんだよな。」とつぶやく。その一方で、彼は、農村のこれまで受け継がれてきた自然や文化を見直すこと、その中で子ども達への教育、地域作りの取り組みを住民こそが主体となっていくことの大切さを強調する。そこには国際交流・国際結婚の担当者として直面した農村の課題と、農村の中に潜在的に内蔵されている可能性との狭間で、複雑な思いが交錯していることが感じられる。彼は次のように語る。「これから重要なのは村民の価値観の変革だべや。おらだの村にだって、貴重な財産、良さがあるはずだべ。」そこには、農村住民が本当の意味で意識的にも物理的にも豊かに生きるための模索が見て取れるのである。

さて、こうした地域主体の教育活動は次の 3 点で特徴付けられる。1、地域のよさを再発見・再評価する取り組みであること。それは、自然だけではなく、地域の文化や知恵や技術、それを担う人材の再発見・再評価の側面を持っている。2、地域の自然体験や環境教育活動が主なテーマとして行われており、地域内だけにとどまらない普遍性を伴っていること。3、前述の村民会議や推進委員、そして既存の地域組織が連動して集落住民がコアメンバーとなって活動が仕掛けられ、集落全体に呼びかけた上で、展開されていること。そして体験学習や環境教育活動はそれ自体が住民を巻き込んだアクティビティあること。これらのことは結果として地域内コミュニケーションを活性化させることにつながった。

このような動きの中で、村内に、地域住民による文化伝承活動や自然体験活動などの自主的な各種の地域教育活動団体が誕生していくのである。

## 2、ムラの良さ再発見、再評価～里地里山保全運動と住民主体の地域づくりの展開～

さて、こうした全村レベルでの動きと呼応するように、著者の住み込んだ地区においても、住民主体の地域学習や体験活動が急速に進んだ。これは従来の集落活動・行事とは明らかに性格の異なる動きである。村内でももっとも山間地にあるこの地区にとって、

このような住民主体による地域学習や体験活動は 3 つの点で重要な意味があったと考えられる。第 1 に、活動がこの地区の集落特性に基づいて自主的に集落住民全体に声掛けされたこと。第 2 に自然や地域生活とのつながりが薄い今どきの地元の子どもたちにとっては困難であった地元農山村の自然や文化にアクセスすることを学ぶ場を提供したこと。このことは、地域の自然や文化を子どもたちに教え伝わってないことを残念に思っていた多数の年長の住民を揺り動かすことにつながった。同時にこのことはお年寄りや子どもたちだけではなく、若手世代層の大人、女性達、外国人花嫁にもインパクトを与えることになったのである。子どもたち同様、農山村の自然や文化にアクセスできなかった（あるいは、しようとはしなかった）これら若手の層も少なくとも単なる「田舎の何も無いムラ」ではないことに気がつき始めるのである。そして、第 3 は住民が主体となって地域の自然や文化を保全しつつ新たに創り出していこうという、「里地里山保全活動」として普遍的意義付けと集落住民のアクティビティが伴って展開していこうとしているという点である。

さて、当地区は、著者が住み込みの研究を行っていたということもあって、地元住民は著者を最大限に利用したようだ。あるとき、著者自身の研究上の必要性もあって、「地元学」という集落調査を行った。これは、集落住民と著者やその他の外部参加者が一緒に集落や周辺の里山や川の環境調査や生活文化調査を行うものである。ちなみにこの手法は住民がよほど積極的に地域活動に参入するような地盤がなければできない調査手法である。当地区ではこの地元学をスムーズに行うことができた。ある日の一日集落住民 40 名ほどが集まって、地元学のための集落やその周辺の里山や川の探検をした。その結果、様々な山村集落を取り巻く自然や暮らしの知恵・技術、郷土食が再発見されたのである。地元住民にとっては「当たり前なもの」が、外部者が指摘することで、それが地域独自の特徴的なものであること、価値あるものであることが、浮き彫りになってきたのである。

「地元学」は地域住民が取材・調査者に利用されるのではなく、積極的に外部者を利用するという能動性を持つ契機でもあった。著者とは集落に入る以前から付き合い合っている、地元で子どもたちへの環境学習を進めている S さんも「俺たちも受身で構えているのではなく、いい意味で出川さんを利用するべきなんだ、とみんなで話しているんだ」と楽しそうに語った。

地元学の推進は、外部者が地域を再発見・再評価するというよりは、外部者の目線の違いを利用して地域住民が自らを再発見・再評価する働きを持った。このような中で、一過性のイベントではなく、恒常的に地域学習や環境教育、そして地域づくりを進めていくような動きが出てくるのである。そんな中で立ち上がった組織が「自然学校」であった。地区会長を初めとする集落の代表者が次のような呼びかけを行った。

「さて、都市化社会の中で、近年当地区においても、子供たちへ里の自然環境や文化など、本当に人間らしく生きるための知恵や技術を伝えるということが求められています。先日、H集落において『地元学』という手法を用いて、周辺の里山、川、集落内を住民や外部から訪れた方々と一緒に歩いて調べてみました。その結果、極めて豊かな自然環境や生活のさまざまな知恵や技術、文化が角川にも数多く存在することが明らかになりました。しかしながら同時に、それらの文化が受け継がれないまま廃れようとしている実態も分かりました。こうした状況は当地区を愛する者として寂しい限りです。このような状況をかんがみて、当地区の住民が一致団結して、子どもたちに地域の自然環境や生活文化を伝えるメッセージを発する必要があるのではないか、そのために地元住民を主体として子供たちに地域の里の自然や生活の知恵や技術を伝える場をつくらうとする声が起こり始めております。そしてそのような知恵や技術、文化を持っておられる方々を広く募る必要が出ております。今回の集会ではこの点を中心に、当地区を愛し、地域作りに日々取り組んでおられる各集落の住民の声がけをお願いしたい旨、話し合いたいと思います。」

ここには、地域活動が地域学習を経由して集落の潜在能力を活用した新たな展開、すなわち地域づくりへと向かう契機が見られる。またそれを支えるより普遍的な意義付けと価値付けが見られるのである。こうして住民同士の声がけによって、より多くの住民が自らの関心に基づいて参画できる新しい組織化が行われていった。女性達の活躍の場もまた集落住民の声がけの中で形成されていったのである。

### 3、女性たちによる新しい地域活動への参加と外国人花嫁たちの参加

「自然学校」には、山の学校、川の学校、食の教室、もの作り塾、民話塾などの「学部」がある。これらが地域学習や各種活動の拠点となっている。先生役は集落住民で年配者が多い。さらに、活動をサポートする里親委員会と応援団が併設されている。里親委員会は地域外部の活動参加者を民泊形式で受け入れようと結成された。応援団は高校生が中心となってイベントの際のボランティアスタッフとなって活躍している。

特徴的なのは、女性達を中心に結成された食の教室と里親委員会である。これまで行われてきた自然体験学習、文化伝承活動、里地里山活動などの一連の地域づくり活動は、男性たちが中心で女性達はその主役になることはあまりなかった。しかし、「地元学」をはじめとした地域学習が進む中で女性達の持っている知恵や技術が再発見・再評価されて、必須組織として食の教室が設立されたのである。里親委員会は外部者を里作りのパートナーとして受け入れるための受け皿として考えられ、地域にとどまらない視野を持って設立されている点で特徴的であるが、この里親委員会の中核メンバーもまた女性達であった。

まず、このような地域づくりの取り組みの中で年配の女性達の参入が起こり、その後、外国人花嫁の参入が盛んとなる。食の教室では当初、郷土食の講習会が行われたが、その後、日本人年配の女性から地域の新しい郷土食として、「新しくこの地域に来た外国人花嫁がおいしいものを作っている、それも学びたい」という声が起こった。そして、ちょうど自分の息子の嫁が中国人だとかいうおばあちゃんや隣が中国のお嫁さんが来ているというおばさんが声がけをして、地元の中国人花嫁を講師に招いて、中国餃子講習会が行われた。これを契機にして、多くの中国籍花嫁がかかわるようになった。その結果、1年余りの間に6回にもわたる中国餃子講習会が開かれた。郷土食では参入してこなかった地域の若手女性達も、この餃子講習会に関心を示すことになった。このように多数の女性達が地域づくり活動に参画するきっかけを与えたのはこれら中国人花嫁であったとも言えるのである。現在、中国餃子は地域の新しい産品として産業化しつつある。地域でイベントがある際には常に中国餃子をとという要請が食の教室に来るようになった。先日も県のイベントへの出店を要請されたりするなど、小規模ではあるが経済効果を出せるようにまできてきている。

また、里親委員会が発足したことで、様々な外部者も活動に入ってくるようになった。その中に韓国の留学生が地域の活動を学びに来て、集落の里親委員の家に宿泊することがあり、これに関心をを持った韓国人花嫁が新たに里親委員会に加わったことは大きい。彼女は外部者の目線の違いを目の当たりにして、地域へのまなざしを変えつつ、これまでに3回ほど首都圏の女子学生を宿泊させるなど積極的な活動を展開している。

外国人花嫁のかかわりではもうひとつ変化があった。地区の集会場によく使われる農村環境改善センターの研修室では、毎週土曜日の夜、外国人花嫁のための日本語教室が開かれている。その同じ改善センターに「自然学校」の事務局が設置された。住民のボランティアの力で、長年物置と化していた図書室を片付け利用したもので、当地区の地域づくりに関する手作りの情報コミュニティルームとなっている。ここには、もの作り工芸品、活動写真、住民で調査した結果をまとめた資料、ホームページを作成するためのコンピュータなど、活動が進むにつれ様々な成果物が集積するようになった。こうした現状を日本語教室に通う外国人花嫁が見て、日本語教室を「自然学校の事務局でやったほうが地域の様々なものに接することができて面白い」という声が出た。こうして2004年からは自然学校事務局で日本語教室が行われるようになり2カ年を経過しようとしている。地域の自然と文化を見直し、新たな農山村地域づくりを住民で進めようという動きは、確実に外国人花嫁の関心事となっていっただのである。

外部発信という点ではさらに面白い動きが展開している。現在、地域で起こっている取り組みは、普遍的意義付けをしつつ、より外部に開かれたものである。こうした活動の進展を受けて、ある助成事業によってフォーラムを開催した際、国際的に活躍しているある環境ジャーナリストから「世界に向けて発信しては」との話が出た。こうした外

部の指摘も励みとなって、すぐに地域で動きが出ている。さしあたって自然学校のホームページを作ろうという動きが地域で活性化している。そして、地域活動を紹介するホームページが自然学校応援スタッフの 10 代の少年の手によって作成された。現在、中国語、韓国語、英語バージョンが作成されつつある。この作成に携わっているのが地区の外国人花嫁なのである。彼女たちは地域の自然や文化を自分たちの母国語で表現しようと、日本語教室の際、事務局で夜の 10 時ごろまでかかってやっていた。「すごく楽しいし、ためになる」と彼女らは口をそろえる。そして「もしインターネットを見て、海外から電話やメールが来たら、私たちが対応するのよ！」と楽しそうに話すのである。どのように翻訳しているのか、彼女らの説明を聞くと、日本語の原文に依拠しながらも、彼女ら独自の見方で地域のことを表現しようとしていることがわかる。まさに彼女ら自身の言葉と表現で地域の活動を発信しようとしているのである。まだ完成しない翻訳は「自宅に持ち帰ってやる」と言って今も取り組んでいる。「彼女らのホームページ」は近日中にインターネットに流れ世界に発信されることであろう。

以上、新たな地域づくり活動の展開とその中で女性達や外国人花嫁の新たな参入の様子をざっと見てきた。このような動きは外国人花嫁にどのような影響を与えた（与えようとした）のか、逆に彼女らがどのような影響をこの活動（運動）に与え（与えようとし）ているのか、そして彼女たちはどのように自らと地域を語り出そうとしているのか。次節では、個々の花嫁に焦点を当てて見ていきたい。

#### 第 4 節 山村集落の地域づくり活動にかかわる外国人女性たちの諸相

##### 1、事例 I 軋轢を超えて～フィリピン人女性 A さんと夫の集落会長 M さん～

A さんは地区で最も早くに嫁いできた外国人花嫁の一人である。農山村の自然と文化、そこでの人々の活動に関心を寄せる私にとって、正直に言うと、彼女との最初の出会いは、必ずしもよい思い出ではなかった。「集落の因習」「閉鎖的で井の中の蛙のような人たち」・・・彼女の口から出る言葉は集落生活に対して否定的なものばかりであった。彼女からは、取材・調査者に対する苦言も聞かれた。「もういろんな人が来ていろいろと聞いていった。テレビにも紹介された。けど、良いことだけを書いてくれるならともかく、私がわからないところで、悪いことが書かれるのではないか、あるいは私が言ったことではないことまで書かれたこともあるし、本当は取材や調査なんかは受けたくはないのよ。」

さて、A さんが暮らすのは当地区でも最も奥の上流部にある集落のひとつである。そして彼女の夫 M さんはその集落の会長である。彼は、早い段階から地域づくりの活動に参画していた。河川の清掃ボランティアのメンバーとして活動を行ったり、溪流をテーマにした産業振興のプロジェクトの事務局となっていたりしている。そして、兼業農家で仕事を持ちながら、非常に忙しい毎日を送っている。彼は「この地域は農業や経済

的な点ですごく厳しい。けれども、俺は個人的にこの地域が好きだし農業が好きだからやっている。せっかくこうした地域に生まれ育ったのだから、この地域のよさを生かして夢を持って暮らしていきたいと思うんだ、子どものためにもね」と語る。いわゆる地域の自然、文化と伝統に誇りに自信を持った郷土を愛する地元男性の典型と言える。

だが、一方で妻の Aさんは、上記のように地域生活や活動に対して否定的なまなざしを持っていたといえる。さらにキリスト教徒である彼女は、宗教的な理由から、お墓参りもしないし、仏壇を拝むことも、もちろん法事などの仏事へかかわることもしない。このことは家族内での夫や姑との軋轢を高めるだけではなく、親戚間での軋轢の原因ともなったという。夫の Mさんは次のように話す「まあ、仕方ないことだろうけど、自分の家の先祖を敬うということぐらい、子どもたちにも大いに関係のあることだし、もう少し何とかならないものかな、とは思うんだけどね。」だが、長年この集落で一緒に暮らしてきたということもあって、これほどの相違が両者にあり、時に筆者の前で激しく意見を言い合いながらも、意外にこうした難しいと思われる問題にもあっさりとしているのが分かる。もうお互いに「言い合える仲だからね」と Aさんも Mさんも口をそろえる。だが、上記の自然学校の地域づくり活動の結果、集落のリーダーとして夫の Mさんはさらに活発な活動を展開することになり、Aさんとの軋轢が高まってしまった。

Mさんが会長を勤める集落は前節で紹介した地域づくり活動がもっとも展開したところである。Mさんは、集落住民全員に呼びかけての『地元学』の実施、土日のほとんどすべてで集落ボランティア活動、イベントのための下準備などにかかなりの時間を費やした。このようなわき目も振らずに活動を展開する夫に対し、Aさんは、「いくら集落会長と入っても、あまりに家族や子どもたちをほうっておいて・・・」と苦言を言い出した。実際著者にも「家族へ過剰負担にならないように活動を何とかできないか、夫を止められないか」と相談を持ちかけたこともあったのである。しかしながら、私はそのとき既に彼女の語り方は従来とは異なっていることに気づかされた。「地域の自然や文化を生かしていくことの大切さは確かに分かるし・・・」「集落会長の婦人として、できる限り協力はしていかなければとは思うんだけど・・・」と、限定表現がつくのである。これは従来彼女の語りにはなかったものであった。これは地元学で外部の参入者から受けた賞賛のまなざし、地域の女性達と郷土食を作った際その評価の大きさに驚くなど、新たな地域づくり活動が彼女のまなざしに与えた影響の結果であったと見ることができる。

夏のある日、夫 Mさんと集落の男性たちが里地里山保全活動のための散策道作りの一環として建てたあずまやを日本語教室のメンバーと見に行く機会があった。Aさんは大変びっくりしたようだ。「こんなすごいものを夫たちは作っていたの・・・。」その後しばらくして自然学校主催の秋の里山散策会がこのあずまや周辺の里山で行われた。その時 Aさんが子どもたちをつれてあずまやまで登ってきた。それまで彼女は野外系の

活動には自分のもとより子どもたちを参加させたがらなかった。登ってきた彼女は、「これ、夫が建てたのよね」と連れてきた子どもと一緒にあずまやに腰を下ろして、自慢げに話していた。

彼女もまた、毎週土曜日、自然学校事務局で開かれている日本語教室に来ている。著者がホームページの英語翻訳の直しをお願いすると、「英語はしばらく使っていないからちゃんとできるか分からないけど・・・」とそう言いながらも快く引き受けてくれた。地域の自然や自然を利用した活動など、その意味をちゃんと理解していないと正確に訳せないからと言って、私にいちいち確認しながら、あるいは事務局にある地域資料を参照して、「もの作り塾は、ここでは山の自然の素材を利用して手作りで作るといことですよ」「食の教室は地元の作物を利用して手作りでその集落や家ごとに違いがあるということですか」と確認しながら、本当に丁寧に翻訳を直してくれた。帰りがけ、出来上がった翻訳文と一緒に見て、私が「まあ、このホームページの内容も実際には M さんが書いたようなものだしね」と言うと、A さんはニコッと笑って「そう、本当に夫には困ったものよ」と言った。そして、彼女は自分が直した英文と夫 M さんに見せるための日本文のホームページを小脇に抱えて事務局を後にした。

## 2、事例Ⅱ 中国人花嫁たちがつなぐ女性達の活動～中国餃子作りを中心にして～

当地区は中国から来た花嫁が多い。当地区に暮らす外国籍花嫁 11 名のうち実に 8 名が中国籍である。中国籍婦人は集落行事に参画しているのを見かけることが多かったし、月一回行われる女性達の集まりお観音講などにも参加している人が多い。もちろん、彼女らもまた、地域に嫁いできた当初は、言葉のやり取りで困ったり、慣れない集落行事へ参加したりするなど大変ではあったようだ。しかし、彼女らは概して地域生活を肯定的に語る傾向がある。

地区で中国人としては比較的早くに来日している B さんは次のように語る。「でも田舎もいいよね。慣れたから、やっぱりこっちは街中よりもっと良かったと考えるの。何もかも便利でしょ。自分のうち畑もあるし、食べ物も好きなだけ作ってあれば、何ぼでも食べれるでしょ。街中だと何でもかんでも買わないと食べれないからね。こっちでは、自分で畑作ってあれば、いつも新鮮なものの味で食べれるでしょ。だから自分で作ってあれば、好きな味作って食べれるし、新鮮なものを食べれる。」とはいえ、国際結婚には影の部分も付きまとう。そして一般的に言われているのとは異なり、夫の方がはるかにそうした妻の苦悩に敏感で、外部者にきちんと伝えようとすることもあるのだ。インタビューを終えて、著者が帰る際、玄関先で B さんの夫である K さんは私を引き止めて「まあ、妻はあのように言ってくれているが、来た当初は本当に苦労していたんだ。それでノイローゼのようになったこともあった。だから俺も相当心配してドライブに連れて行ったり、気を配ったりしたものだったんだ。今はまあ落ちたようで本当に良かつ



たよ」と照れくさそうに話した。

さて、前節で触れた自然学校食の教室の声がけによる中国餃子講習会の講師は現在 6 名いる。ただし 1 人は夫と出稼ぎで首都圏に出ているため現在は不在である。当地区には 8 名もの中国人花嫁がいるが、必ずしも相互の交流があったわけではない。ところが、食の教室の取り組みの中で中国餃子の作り方を習いたいという日本人女性たちの声が起り、地区に住む 4 名の中国人花嫁が集って中国餃子講習会が開かれることになった。このことをきっかけにして地区内の中国人女性達は新しいつながりが形成されることになったのである。講習会では、彼女ら同士ではほとんど中国語でコミュニケーションをとる。それは彼女らの間でも来日して長期間経っている人からまだ 1 年未満という人まで様々であり、日本語の習熟度がまちまちだからであると同時に、母国語でコミュニケーションをとることがやはり快いということもあるのだろう。日本人女性の側も日本語と中国語、そして朝鮮族の中国人花嫁もいるため時には韓国語が飛び交って講習会が進むのに少なからず感動を覚えたようである。そして彼女らの皮作りから具の調味の仕方まで鮮やかな手さばきに舌を巻いた。「中国の嫁さん、たいしたものだべなあ」というわけである。こうして、この中国餃子の取り組みには、食の教室の年配の女性達はもとより、特に若手女性達が関心を持って参画するようになった。

このように始まった中国餃子講習会は、まず地域の女性達の絶賛を浴びた。さらに実験的に販売しようということで村の「婦人の集い」で販売した結果、地区外の女性達からも大絶賛され、実に短期間で当地区の名物として地域の女性達に意識付けられるようになったのである。

現在、中国餃子作りと販売はイベントの場を中心に行われている。そうしたイベントでの試食・販売の話があったとき、まず、中国餃子だけではなく郷土食の提供も視野に入れて地区として、何が提供できるかを話し合うために食の教室の会合が開かれる。中国のお嫁さんたちや日本人が集まってどのようにおこなうかを検討するのである。この協議には複数の言語が飛び交う。というのも、中国のお嫁さんたちは日本語と中国語と時には韓国語を駆使して話を進めるからである。それぞれに味のこだわりがあるので、打ち合わせはかなり綿密なものになる。本当の味を出したいという彼女らの共通する思いがあるのだろう。もっとも年配の中国人花嫁の C さんは「餃子、中国の誇りよ。だからいい加減なもの、作れないわ」とこの会合でも他の女性達に話していた。これは同じイベントで漬物や山菜料理などの郷土食を出そうとしている日本人女性たちも、「これがこの地区の味か、と思われるわけだから、やっぱりいい物を出したいべや」と話す点で共通する思いなのである。

このように、中国餃子講習会は地区の女性達を様々な形で結びつけた。発端は自然学校の食の教室のおばさんたちの声がけであった。それが中国人花嫁の間のつながりを作り、そして、それが逆に若手の日本人女性たちをこの取り組みに関心を持たせ、新しい

かかわりを創り出す契機となった。今、地域の自慢できる食文化として郷土食も中国餃子も各種イベントで当然のようにして一緒に出され、両者とも今後の産品化へと動きが高まっている。2004年には県の産業フェスティバルで郷土食と中国餃子ということで出店を要請されるなど地区の名産として知名度を上げている。地区でも中国人花嫁はじめ地元の女性達や材料の調達をしてきた地元商店主などの間で新しい産品として発信していこうとしているのである。前述の集落会長 M さんもこうした動きを地域づくりの活動としてサポートしようとしている。

こうした動きを支えるのは、女性たちが担っている文化的背景に対する自信であり、それは地域の女性達とのつながりが形成される中で相乗的に創り出されているものである。最近中国から来日し、日本語がまだまだ不自由で集落に慣れるのにも大変な時期にある D さんは、しかし毎回のようにしてこの餃子や郷土食を初め自然学校の活動に参画している。彼女はたどたどしい口調だが明るく次のように話した「中国の餃子はおいしいですよ、こうやってみんなと作って食べたり販売したりするのは、とてもおもしろいことですよ」と。

### 3、事例Ⅲ 韓国人女性～外部との交流と里親委員会～

韓国のソウル出身の E さんは、当初、思い描いていたのとはあまりにも違うこの農山村環境に戸惑ったという。

「とにかく、向こうでは都会ならではの仕事をしてきたし、こちらでも同じようなことをしたいという思いもあった。そんな感じで日本に来たから、こっちに来てびっくりしたわ。動物園にいるような動物が身近にひょこひょこ出て来るような環境だし、夜はもう 8 時ともなるともう真っ暗でしょ。どこにも出歩けないんだもの。自分の国でやって来たことを生かそうとしてもここでは、あまりに環境が違い過ぎてね、みんな諦めたわ。ここはとても田舎過ぎるもの・・・。」

ところで、自然学校の進展の中で特に彼女が住んでいる集落周辺は里親委員会に参入する家が多かった。そんなわけで、地域づくり活動が進展する中、彼女の周りに外部の参入者が増えていったのである。そんなある時、里親委員会のメンバーの家に、外国人花嫁や村の国際化のことを学びたいという韓国人の女子留学生が宿泊することがあった。せっかく海外からの学生で、しかも国際化や地域づくりのことを学びたいということを知った里親委員会のメンバーは話し合っ、里親委員会のメンバー全員と餃子で活躍する中国人花嫁たち、そして留学生と同じ韓国籍の E さんに呼びかけて、歓迎・交流会を開くことになった。E さんにとって、このことは地区で他の外国人花嫁が楽しそうに取り組んでいること、そしてこの地区に海外からもわざわざ学びに外部者が来るという点で、衝撃を覚えさせるものだった。そして、この日の歓迎・交流会の際、「こういう活動だったら、私もやりたいね」と、すぐに里親委員会に入ることを決意するのである。こうして、彼女はそ

れから半年の間に 3 回ほど外部者を受け入れ宿泊させている。外部者との交流は彼女にとってもおもしろいようだ。また、一人娘が狭い村社会の中特定の人としか接しないことに心配を抱いていた彼女にとっては、外部者との出会いを増やすこうした取り組みは一石二鳥のものであったという。また、里親委員会で県外への研修旅行を行った際にも参加し、他のメンバーと共に様々と気づく点も多かったようである。県外の田舎をテーマにした食堂兼宿泊の施設を見て、「私だったら、もっと様々な工夫でいろいろとおいしい料理も作れるし楽しめそうだ。私だって地域のあるものと自分の料理技術をアレンジしてよその人に提供することができるんだね。」ここには、農山村地域の特徴と自らの文化的背景とを生かした活動をしていこうという、より能動的な新たな語りが見られるのである。地域活動に里親委員会として参画する彼女の取り組みには、県の教育部局からも関心が寄せられ、先ごろ、外国人花嫁の地域づくり・家庭作りのフォーラムでシンポジストとして参加をお願いされた。2004 年 12 月、彼女は当自然学校と共にそのフォーラムでのプレゼンテーションを立派に行ったのである。どのように地域の活動と新たな自分を創り出し語りだそうかを模索しながら。

## 5. まとめ～地域づくり活動の中で紡ぎだされる共創への糸口～

以上、東北の農山村地域の最も小さい単位における地域づくり活動の現状と展開の最新の状況を見てきていただいた。それは、従来とは逆に外部者のまなざしを利用しながら、集落住民自身が自らの努力によって集落の「よさ」に気づき、農山村を再発見・再評価していく過程であった。そこでは、住民自らが外部者の力も借りつつ本当に意識的にも物理的にも豊かに生きる地域社会を創り出すということが模索されており、それはより普遍的な意義付けによって動機付けられ、同時に外部へ開かれたものであった。

この地域作り活動は、地域でこれまでに形成されてきた潜在的な近所づきあいのあり方によって住民の手でコーディネートされ、より多様な人々が参画できるものとして地域の内部、そして外部へと開かれたものとなった。その中で、外国人花嫁の参画が見られた。いや、それどころか、彼女らがいたからこそ生み出されることが可能となった集落住民同士の新たなかかわり、そしてその中で形成された地域の新しいまなざしがあった。

このように、多くの人々のかかわりの中で、新しい地域社会のあり方を創り出そうとし発信しようとしているのである。彼（女）らは今、誰かにお願いして表象してもらうことなく、自らの力で語り出そうとしているのだ、自分達の手で確かな感触を楽しみつつ。

## 参考文献

エドワード・W・サイード

1993 板垣雄三他監修、今沢紀子訳「オリエンタリズム」平凡社ライブラリー

桑山紀彦

1995 『国際結婚とストレス』明石書店

仲野誠

2003「政策としての文化とコミュニティの創造—東北地方の山村における異文化の戦略的包摂—」（『鳥取大学教育地域科学部紀要』（地域研究）第4巻第2号）

大田好信

2001 『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか—』人文書院

スピヴァック

1998 上村忠男訳『サバルタンは語るができるか』みすず書房

寺口端生

2001「環境社会学のフィールドワーク」（飯島伸子他編『講座 環境社会学第1巻 環境社会学の視点』有斐閣）

---

<sup>i</sup>環境社会学の分野では住民と研究者の新たな関係性を創造していこうと既に活発な議論が始まっているようだ。寺口端生 2001p. 258-259 参照のこと。

<sup>ii</sup> 国際結婚で外国籍婦人と日本人男性との間でできた子どものこと。最上郡を対象にしたこの種のテーマのフォーラムやシンポジウム、研究報告などではよくこの用語が使われた。

<sup>iii</sup> 誤解がないように確認しておくが、当村においては、行政はあくまでバックアップであり、いわゆる行政主導の国際結婚推進という参入の仕方ではない。行政主導による国際結婚への動きはあったことは事実のようだが、それは住民の意志によって退けられた。背景には20年にも渡る韓国を中心とするアジアの農村との農業交流の歴史とそれを担ってきた農村青年達の動きがある。詳しくは、仲野誠 2003 を参照のこと。